

『TPP亡國論』

中野剛志著
集英社新書 798円



似ていて、最終的には国内問題なのである。

基調として著者はTPPの議論に鋭い筆誅を加え、その一つひとつがていねいにクリーンヒットしている観がある。理論構成能力と筆力というのが同じ著者に宿る保証はない。むしろ

自由貿易に関する諸問題は、普段は国際関係の雑事のなかで、普段は国際関係の雑事のなかで、インフルエンザ・ウイルスのように冬場になるまでじっと身を潜めている。一度世情に訴えるものとなるとその影響はあまりに広く、そして深いところにまで浸透する。だから沈静化するのに時間がかかる。なにしろ利

多くの場合広く物を見る人の筆力はその視覚の精巧無比な知的敏捷性に追いつくことがない。著者はその意味で、「眼高手高」ともいうべきで、一時のマルク

めで見えてくるものが「政治的現実」の現実である。著者の意見に賛成であれ反対であれ、一つ一つの政治的立場をスコープにして見ることで、驚くほどに問題が立体的になる。

「政治的現実」の現実を知る

害関係者は多く、しかもその少なからざる割合が旧世代の利権線が意思決定の基礎であつてほし

いためである。特に政府間交渉を伴う事象についてそのことがいえる。一般国民にとって、内側でのどのような思惑が働いているのかを忖度する機縁にあまりに乏しい。

近ごろかまびすしく言われるTPPについての書物である。官僚といえれば機能的組織の代名詞であつて、確かにかのマックス・ウェーバーさんもどこかでそんなことを言つていた気がする。官僚機構の比較的強い日本にあつては、強力なシンクタンクとして、個よりも組織力のイメージが特に強い。だが近年新しい形で時事問題に容喙するばかりでなく、官僚の身分を維持しながら自説を堂々と展開する人々が出てきた。私はそのような傾向をポジティブに考へてゐる。理由は簡単だ。行政の現場にいる人の目線が意思決定の基礎であつてほし

いためである。特に政府間交渉を伴う事象についてそのことがいえる。一般国民にとって、内側でのどのような思惑が働いているのかを忖度する機縁にあまりに乏しい。

そこには、TPPを理解するための知識が豊富に含まれる。TPPを理解するためには、まずTPPの歴史的背景や、TPPが世界経済に及ぼす影響などを理解する必要がある。TPPは、主に米国と日本、韓国、カナダ、メキシコ、オーストラリア、シンガポールの七ヶ国による協定である。この協定は、貿易規則の統一化を目指すもので、世界中の貿易規則を統一するためのものだ。

TPPを理解するためには、まずTPPの歴史的背景や、TPPが世界経済に及ぼす影響などを理解する必要がある。TPPは、主に米国と日本、韓国、カナダ、メキシコ、オーストラリア、シンガポールの七ヶ国による協定である。この協定は、貿易規則の統一化を目指すものだ。しかしもいたるところに

社会生態学研究者 森里陽一

『その「正義」があぶない。』

小田嶋 隆著
日経BP社 1575円



出版不況と世間では言われる。が、それはただ本当にほし

いコンパクトな情報がないだけの話だ。新書などを見ていても、雑誌なのかパンフレットなのか、あるいはその中間なのかわからない、一言で言えば、誰に伝えたいのかまったくわからぬ種類のものが少なからず目につく。

そんななか評者が最近とても気に入っているメディアがラジオだ。とくにネットラジオである。iPodが本当にすごいと思ふのはそんな瞬間である。やはりスピード・ジョブズは偉かつた。彼がつくったのは新製品ではなかつた。知的吸收の新たなスタイルだった。本来ラジオはメディアの王様であつて、かつては政治や戦争の帰趨まで支配した時代さえあつた。今ではむしろひつそり

とそれでいてホットかつパーソナルなメディアの地位に収まっている。ネットラジオなどは好きな時にダウンロードして聞ける。ラジオの前で座つていなさいといつた高飛車な姿勢ではない。そんなところが気に入っている理由の一つでもある。それに本

くうえでの示唆が大いに得られる。そこでせめて知つておきたいのは『現代用語の基礎知識』的な羅列的な情報ではない。むしろ何を知るべきなのに知らずにいるのかである。

この本が教えてくれるのは、平面な事実そのものではない。賢らだつたインテリ風の知識ではない。むしろ現実から透けて見えるもう一つの可能態として見えてくるのが、この本が教えるところである。それは知識の体系のなかに空いた穴を見出し、そこから来るべき何かを見定める。

なぜなら、多くの場合人が陥りがちな罠とは知らなかつたことにあるのではない。知り抜いていると思つてていること、つまり「常識」のなかにあるからだ。この本では、社会を取り巻く多様な事例から、エッセイ風に肩を並べて、現代という時代の力を抜いて、現代という時代の本質的形態が彫琢される。これは誰でもやつてみればわかることだが、口で言うほど簡単なことではない。

その種の知性を活性化させるのにぜひともなければならぬのは、自由な傍観者の立位置だ。この本が成功しているからならば、この著者が傍観者の立場に身を置き観察することに徹し、それに成功しているからだと思う。

罠は「常識」そのものにある

とラジオは思いのほか親和性が高い。実はネットラジオがつづり、「いい本だよ」と耳打ちしてくれたのがこの本である。著者は小田嶋隆、まあ知る人ぞ知る名といつてよいだろう。小田嶋が日経BPのオンラインで連載した時事問題への切り口から、今という時代を読み解

は一つの鬼門である。正義自体が悪いのではない。正義があらゆる議論に終止符を打つ、いわば相手に新たな問い合わせを禁ずる語法として使用されがちだからである。いわば「思考停止ワード」である。

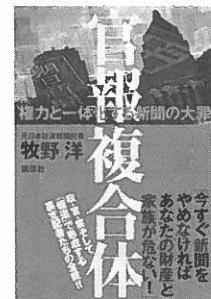
時にこの本のような精神を飛翔させつつ、同時に皮肉な笑いを伴う観察眼が社会には必要である。それはニッチでありながら、社会を根底から賦活する不可欠の要因である。

社会生態学研究者 森里陽一



『官報複合体——権力と一体化する新聞の大罪』

牧野 洋著
講談社 1680円



「メディアはメッセージである」との卓抜な評言を残したのはマーシャル・マクルーハンであった。あえて言えば、メディアはコンタクトレンズである。コントラクトを経由して外部の世界を知覚するとき、コンタクトはそれ自体前景化しない。見えるほどに、人は自分がコンタクトをしているのを意識しない。マクルーハンの言になれば、マスコミは社会のコンタクトトレインズである。何をどう知覚し、理解し、論を形成するに当たって、コンタクトの性能や形状は致命的に作用する。その点で世論とは社会のコンタクトレンズの映す映像そのものである。

従来、社会的不調が問題にされるとき、一般的に責任追及されるのは政治家、官僚あたりまでだった。政治権力をある程度具体的に考えるに当たつて世人

民度を引き上げる一冊

を寄せるのは想像を絶するほど困難である。他方で新聞をめぐる状況が厳しい。それが機能不全の原因なのか結果なのかはここではふれない。しかし確実なのは、社会的意識の形成に当たつて今なお新聞が権威の一隅を占める事実である。新聞の不調が叫ばれな

アメリカで活動している。とくに光るのは、日本社会の構造に由来するメディア特性である。隨時参照されるアメリカの事例とわれわれの固定観念との対比に目を見開かされる。そこに見られる著者の魂の葛藤が言説に独自のリアリティを付与する。日本社会のまとうコンタクトが歪み、汚れ、そして批判対象となるところに一つの

がらも、今もつてテレビもネットも情報上のお墨付きを無意識に新聞に求めている。逆に言えば社会は新聞を核に強力にマイ

ンドコントロールされている。不調を一つの発端として今新規にあるのかかもしれない。メディアとは本来機能であつて職業ではない。本書の著者も、新たなカウンターパワーに期待を寄せている。しかし、その背後には新聞自身の自己再生がござっていた。想像がつくように、業界の内部に身を置く者にとって自業界の屈折状況に意識

にはいかない。それはプロの記述をきた者として絶えざる葛藤を歩んできた者としての一つのけじめのようにも見えなくはない。繰り返しになるが、本書のよ

この本はそのような新たに獲得された社会的認識を育て、発展させる意味を持つ。著者は日本経済新聞社で自らジャーナリストの道を歩み、経済界のキーパーソンと直接の交流を持つ一流記者として著名だった。しばらく前にフリーとなり、現在は

社会生態学研究者 森里陽一

「考えるクルマ」が世界を変える

W・J・ミツチャエル他／室田泰弘訳
東洋経済新報社 2940円



技術の変化というものは春先のそよ風のように現れて、気がつけば世界の成り立ちそのものを変えていく。

今の時代、クルマほど身近な財はない。考えてみれば、現在の都市計画、大型ショッピングモールの建設、何から何までクルマの存在を前提に考えられてる。空間がクルマをつくったのではない。クルマが空間をつくったのだ。

そんな身近なものだけに、ふだんあまり腰を据えて考えることも少ない。この本は頭脳の根底を刺激してくれるところがいい。MITとGMの共同研究を基礎としたものであり、クルマというものが生成した進化の根源に立ち返つての思考を促す。すでにわれわれが手にするスマホがクルマの類例として引かれる。スマホはPCなのだろう

か。携帯なのだろうか。あるいはその中間なのだろうか。その出でを問うてもしかたがない。スマホはスマホとしか呼びようのない情報端末である。そして実際に、スマホの存在が就職活動から待ち合わせに至るまでの現実の人間生活を変えてしまった。

クルマが「スマホ」化する

ならばクルマはどうか。この基本テーマは、クルマこそが次世代の情報端末になりうると同時に、都市問題、エネルギー・環境問題等々の解決のトップランナーになりうるというものである。確かにクルマの淵源は鉄道と同じ19世紀の技術である。その

意味では、成熟しきった産業だ。だが、別の側面に焦点を当てるところで全く見方が異なる。クルマは馬車の延長（最初の名前は「馬なし馬車」！）としてはじまり、今に至るまで基本原理をえていない。ゆうに百年以上もある。本書が大胆に提唱するのは、そのような一見自明の原理も、考え方次第で全く異なる形姿をとるようになるということだ。しかも、現存技術の組み合わせ次第で、クルマは新産業としても魅力的なカテゴリーを形成するとい

う。たとえば、制御技術を使えば、自動運転や衝突防止がはかれる。いわばクルマ自身が「考える」ようになる。従来クルマは人間の限定的な知覚能力にもとづいていた。かりにそれを技術で越えられれば、理論上交通が終始一貫した特徴といえる。クルマという映写機から、都市というスクリーンのうえに鮮やかに未来が映し出される。とくに日本のように、エネルギー問題を常時抱える社会にそこで提示されるコンセプトは有効な方策を示すように思われる。

もちろんクルマだけが変わればいいなどというナイーブなものにとどまらない。クルマと都市のメディアでもある。メディアとはそれ 자체がインターネットとして全体の本質を象徴する存在ということである。ならば都市の設計も自ずと変わらなければならない。フェイエスとして全体の本質を象徴する存在を変えることによって、都市の設計も自ずと変化しない。たとえば、交通事故率が激減すれば、それは損害保険の概念を変えてしまう。あるいはコンパクトな都市設計が実現すれば、郊外の地価に巨大な影響が及ぶ。



【ウェブで学ぶ——オープンエデュケーションと知の革命】

梅田望夫・飯吉透著
ちくま新書 861円



確かにドラッカーだったと思うが、教育の形態は教科書というツールが発明されるまで、800年間変化しなかつたという。そして現在私たちが持つ学校の観念も、教科書という教える側の論理に準拠したものである点で、数百年変化していない。この本は2010年に出たもので、刊行から多少の時間が経過していることもあって、とりあげるのに躊躇もなかつたわけではない。偶然最近存在を知ったこと、そして内容が知的刺激に富み、かつ2年近く前と現在を比較しても、ウェブの進化状況がよくわかると思ったのが、選定理由である。

ウェブの進展度合いはドッグイヤーともマウスイヤーともいわれる。そうだが、そんな空疎な枕詞にたいした意味はない。大切なのはウェブに伴う人間社会の進展のほうである。

結局のところ、使いこなせない道具は無意味どころか有害になる。ウェブについて極端な比喩を使えば、社会の全員が毒にでも薬にもなりうる物質や、切れ味のいい刃物を手にしてしまつたのに似ている。それらをどう機能させるかが大事なのだ。

ウェブを学び、ウェブで学ぶ

この本の長所は、明るいところに着眼する姿勢にある。ネットに関するものすごくグレードーな世界が、陽光に対する陰影のように急速に伸長したのはわずか10年ほどのことである。それはネットがはらむ危険な要因を前駆的に示すものだつた。社会に関する問題についてい

えば、ほぼ例外なく、有益なもに転換する努力なくして、害毒はとめどなく広がっていく。豊かである。ウェブが教育といふものをいすれ無償にし、しかもスマートで何ができるのか、大げさに実演して見せたり、日本が世界の実勢からどれほど取り残されているのか嘆いて見せたりと、浅薄なパフォーマンスばかりが目につく。しかしその認識の根本にあるのは、ネットと社会の成り立ちに伴う考察の決定的不足である。とくに「学び」という人間特有の行為についてそのことはいえる。

学びはほかの活動、たとえば経済的行為と比較して、あまりに複雑だし、成果が出るまでに長い時間を要する。そして何をいかに学ぶかは、ほぼ例外なく経済的インセンティブが利かない。人は金のために学ぶのではない。自分が何者かを知るために学ぶ。そこで著者たちが見せて

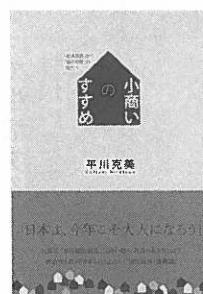
いる。このことは、学校で終わりと思われる向きもなくはない。しかし人は生きる限り学ぶ。とにかく学ばざるをえない。それは会社に勤めようと、家事に携わろうと同じである。おそらく民主主義とか自由主義の価値を担保してきたものは、社会の構成員の学習能力にあつたはずである。学歴が従来ことのほか重視されてきたのも知識の質の形式的保証が不可欠と考えられたために違いない。

学びのスタイルが変化すれば、極端にいえば、世界観が変化する。学びは高度な認識行為を言い換えたものにほかならぬからだ。この本が持つ高度な説得力は、その点にもとづいて

社会生態学研究者 森里陽一

『小商いのすすめ』

平川克美著
ミシマ社 1680円



のたつた。
私が本書を一つの哲学だと述べるのは、石橋に見るような透徹した合理主義が、錯綜する時代の波にかき消されることなく終始横溢するためである。

る、そして生きとし生けるものが自然にわが身に培いながらも、気づかずには過ごしてしまつたものに、もう一度纖細な視線を向けてみようと意識を促す種類の概念である。

この種の本が一瞬にせよアマゾンのビジネス部門で1位になつたと聞いて正直驚いた。となるのも、この本は決してきらびやかな成功哲学を説くものでもなければ、安直なポジティティブ思考を推奨するものでもないからだ。

むしろ反対である。今、本格的な経済的衰退過程に入った日本の足下を再び見直し、もう一度しつかりと大地を踏みしめて歩こうと説くものである。

合致しないものは遠からず破綻を余儀なくされるというのがその理由だった。石橋は緻密な合理主義者だったから、満州で生産される物財の総額を計算しそこから得られる価値と、それによつて失われる国際的信用やコストを差し引いた結果、「この取引は合わない」と結論した

「生き方」に古いも新しいもない

稼ぐ方法を教えるものかと思ひきや、そうではない。小商いとは一つの寓喩的表現であつて、あえていえば、これから日本が依拠すべき哲学である。人は小商いとともに生きてきたし、これからも生きていくのだと本書は言う。

かつて日本には石橋湛山とい

合致しないものは遠からず破綻を余儀なくされるというのがその理由だつた。石橋は緻密な合理主義者だつたから、満州で生産される物財の総額を計算しそこから得られる価値と、それによつて失われる国際的信用やコストを差し引いた結果、「この取引は合わない」と結論した

い。
本書をビジネス書として手に取る人はある面で幸せである。そこには求める以上のものがあるからだ。

本書の強みの一端はそこにある。この本は今、ここにある現実の形成過程を自らの個人的来歴とともに描き出しており、その点が不思議な説得力を持たせるのに成功している。

今一度立ち止まって現在といふ時代を考えるのに、有益な示唆を与えてくれる本といってよいと思う。

う総理大臣がいた。石橋は戦前、雑誌社でジャーナリストをしていたのだが、朝鮮や満州に破竹の快進撃を果たしていた当時の日本に、小日本主義の立場から帝国主義の自制を説いた。結局身の丈（本書でいうところのヒューマン・スケール）に

正論が正論として流通するところはめつたにないのが現実ながら、ますもつてそれが正論として流通するためには現実を認めるとところからスタートしなければならない。現実とはしかるべき成り立ちと来歴をはらむものであるから、その成立の経路をふまえたものでなければならぬ

貞をめぐって、慣かしい場面がそこかしこにあつた。懐かしさとはもつともあてになる感情の一つである。それは昭和40年代の日本であり、ささやかながら確実に存在していたものだつた。ごく当たり前だつた日常が消失し、異なる原理がしだいに現実を覆うようになると、自分が何を知り、何を知らないのかさえわからなくなる。

社会生態学研究者 森里陽一



『知識サービスマネジメント』

村上輝康著

2940円



21世紀を本格的な知識社会の到来の時代と位置づける見方はかねてからあった。事実、知識自体は仕事に不可欠のものであつて、いかなる仕事にも必要であるのは古今東西変わることがない。今や農業、漁業などの第一次産業でさえ、知識なくして仕事はできない。

知識社会の「知識」とは、それをいかにして意識して、体系的に適用して成果を上げるかにある。ならば、すでに成立した知識の職業として典型的なものとしては、金融やジャーナリズム、そして産業と密接に関係するものとして、コンサルタントがあると思う。

その特徴は、資本が人材に一体化しており、かつての土地、労働、資本による経済の組成を越えたところで機能する点で共通している。現在もつとも熾烈な市場が人材に関わるものであ

るのを見えるならば、そのことはよく理解されるだろう。

本書は30年以上にわたって野村総合研究所でコンサルタントを務めてきたプロフェッショナルによるものである。コンサルタントという職業が成立したのは、戦前のマッキンゼーが最初とされている。それから数十年

大半はコンサルタント向けに書かれた印象があるが、参考にできる層は相当に広いものと考えられる。コンサルを知識職業の代表と考へるならば、知識社会にあつてそこから学びうることは無限にあるということである。

しかも、経済社会といふものは、歴史や文化と密接不可分のものであるから、アメリカや欧洲、中国をはじめとするアジアなどそれぞれの知識の適用の仕方があつていい。

本書で展開される考え方は、

だが、いくらでもやり直しがきくのも知識の特徴であつて、客観的で学習可能であるところから、いつでも新規に更新していくことができる。そのような知識に関わる者の心構えも本書から学ぶことができる。

適用可能な知識を体系的に見極め、成果に結びつけていく技術を学ぶのに、本書は適した参考書の一つとなりうる。なかに

遅れて、日本では60年代にそれには相当する職業が誕生したことになる。とくに野村総合研究所はその草分けであつて、著者はそのなかでもさらに最先端を走り続けってきた。文字どおり道をつくつてきた立場のプロならではのエッセンスが凝縮されている。

知識時代の「教科書」

そのような文化的背景を丹念にふまえ、日本の風土を最大限吟味しながら、新たな社会の展開に備えよと激励してくれるものである。

現在は第一次産業でさえ、旧来のイメージを峻厳に拒否する。すでに紋切り型のものではなく、高度に競争的なものとそ



『街場の読書論』

内田 樹著
1680円



読書はスポーツジムに似ている。きちんと行えば知的筋肉が強化に貢献するけれども、継続が困難なために本当の意味で人の行動を変えるのは稀である。書棚が人の頭脳の中を垣間見させるというはその意味において正しい。逆に言えば、似たような本ばかり読むと気づかぬうちに紋切り型の発想に偏る。そうなると知的活動の活性化より、停滞につながることも少なくない。そこで一人おすすめしたい書き手がいる。

内田樹は現代でもっとも精彩豊かな批評家、評論家である。ものの見方について現代人が学ぶべきところが多い。震災以降、政治論議がにわかに活発になり、ふとした政治的意志決定がダイレクトにわが身に火の粉としてふりかかる機縁が濃くなってきた。私たちは政治の教科書でしか読むことの

なかつた危険な転換点を、今身を持って体験しつつある。現代の学問的知識や経験によつて蓄積された体系が、現代の諸問題に適切に答えられるとは思えない。それは決して知識の無能力を意味しない。むしろ問い合わせのほうが一段高い解決レベルを要求している。AINシユタインは問題が発

知識ある者への指針

生したのと同じ次元にいながらその問題を解決できないと言つた。日本を取り巻く問題にも同じことが言える。もしかすると私は50年前に偶然手にした解決法を今の問題に相も変わらず適用し続けようとしているのではないか。内田氏による『街場』シリーズ

喚起するものと思う。

頭脳は新規な刺激に反応するようにできている。ビジネスマインドはビジネス書の乱読によっては決して醸成されない。それにはリーガルマインドが法律書の乱読から形成されないと、同じであり、ポリティカルマインドが政治書の乱読から決して

ズを読むと一段上の解法が何を要求するのかが見えてくる。街場の語彙には、その他の高踏的でありながら問題の解決には全く無能力な知的な方と一線を開するものであつて、氏のブログを巧みに編集したものである。氏はおおむねビジネスマンと呼ばれる人種に対しては軽い猜疑を隠すことがないのだが、この本はほかならぬビジネスマンが読むことで一定の知的刺激を

社会生態学研究者 森里陽一



『盛衰——日本経済再生の要件』

鳥田晴雄著

東洋経済新報社 1890円



タイトルに盛衰とあり、両義的な含みが感じられる。おそらくそれは医者が患者に接する姿勢に似ている。この処方を守れば治療は別として悪くなることはないだろう。だが、守らないなら、命は保証できないといつているようだ。

日本が本当に衰退の一途にあらゆるのか。その短見に根拠がない。むしろ他国から見れば超絶した強みもあるし、すべてが弱みであるとするのは、すべてが強みであるとするのと同じくられない現実的な想定である。

ただし、一つはつきりしていることがある。たいていの原因と考えられることは何かの結果に過ぎない。あるいは症状に過ぎない。

現在の試練は昨日今日の原因の帰結ではない。それは日本が自己展開してきた戦後史の持つ「症状」の一つである。咳を止めなければ風邪を治す

しかない。風邪を治すのは瞬時にできることではない。本書を紐解く者は、多くの場合、いかに人が原因と結果を取り違えるかに思いをいたすことになる。

ようやくオリンピックが終わつたところだが、東京で五輪が開催されたのは1964年、端的にいえば敗戦から20年も

根因を知る

たつていらないところだった。原爆を2発も落とされて、戦前の超巨大組織の陸海軍を失つた国が、わずか20年足らずでオリンピックを開催するなど、それがいかに常識はずれだったかは想像するにあまりある。

まずは、日本という国が、破竹の勢いで勝ち続けてきた事

実、つまり「成功しすぎたがゆえの結果」が今を語るのに欠かせない認識といつてよい。かかる基本的な認識として教えてくれるのがそこであつて、「メガトレンドの変化」すなわち成功の呪縛のために、変化に乗り遅れたところに意識せよという。

簡単にいえば、日本が世界の波にうまく乗れないのは、愚かだつたからでもなければ、無能だつたからでもない。むしろ、ある時期に超絶したパフォーマンスを上げすぎたためである。いわばすべてが成功的代償なの

本書の持ち味は、足下のギリシャ危機、財政、年金、労働などの公的な制度に関わるところから、医療、住宅、観光等々の産業領域まで、一定のフレームを示しながら、劣後がいかに「合理的」な帰結であつたかを示すところにある。

ここまでできてしまえば後は「合理的」な行動を合わせていけばいい。そのための助言がない。そのための助言がていねいになされている。

おおむね前半は考え方、後半は行動のための助言という構成となつており、論理的一貫性も明瞭である。それが本書を読みやすい書物としている。本来著者は労働経済学者であるが、いに、真夏に着心地のよかつた服を替えずにいるだけのことである。ふつうに見ればそれがおかしいのは誰でもわかる。だが、そんな当たり前のことさえ忘れてしまうほどに、成功体験は人を盲目にするようである。

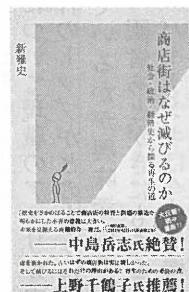
小泉政権で特命顧問を務めた実体験も折に触れてくる。今後のグランドデザインの一端を手にしたい方にもおすすめと

社会生態学研究者 森里陽一



『商店街はなぜ滅びるのか』

新 雅史著
光文社新書 777円



考えさせるタイトルである。

ベースにはかなり実証性の高い論文がいくつもあるのをうかがわせる。ちょっととした記述にも決して手を抜かないアカデミシャンならではのシステムティックな知の扱い方だ。

シャッター商店街というのが決して特異なものではなく、むしろシャッターの閉まつた状態が当たり前のようなご時世になつていて。商店街そのものが機能しない時代になつてしまつた。

評者の高校には自営業者の子弟が多く、家に遊びに行くといずれもが商店街のなかの一角を占めていたのが鮮明に思い出される。戦後の荒波を辛抱強く生き延びてきた商店街が失われた20年のなかではついにその命脈を絶たれるにいたつた。それなぜなのか。そもそも冴えわたるのは、商

店街とは何かという原理論的なアプローチをあえてとらず、むしろ商店街の人為性というか、発明された現象面に意識を向けるところである。そのような角度からすると不思議とその実像が見えてくる。

確かに経済的な構造物は例外なく人為的である。終身雇用や年功序列といった高度成長を支

「成り立ち」を探る意識

えたシステムもまた、古くから存在してきたように見えて、戦後に発明されたものだった。商店街もまた、その成り立ちはさほど古いものではなく、一つの便宜の産物であつたことがついに明らかにされている。では本書の目論見は何なの

べきときではない。ざわざわと落ち着かない状態で何かを拙速に始めてうまくいくはずなどではない。じつと腰を落ち着けて考へるべきときなのだ。

るものとなるだろう。本来そのような目的のために書かれたものではない。そのためのささやかな材料を提供してくれるのはありがたいことだし、本書の役割はそこにあると思うのだが、いかがだらうか。

商店街の衰退の過程を説明するものと思いきやそうではない。

著者には商店街に対する深い愛情があるようだ。商店街によつてしか実現されなかつた機能や価値への確信があるように見える。あとがきでは自らが酒屋に生まれ育つたというパーソナル・ヒストリーを記してその思いをきちんと書き込んでいるのがその表れだ。

だが、もしこの本に商店街再生のための知恵や处方を求めるならば、その期待には添いかねない。一度考えてみませんかといふメッセージである。冒頭と末尾で東日本大震災に言及するのは執筆の意図と思いを雄弁に伝えている。

もちろんそれは本書の欠点ではなく長所である。おそらく著者が知らせようとしているのは、商店街が果たすべき再生の道筋にあるのではなく、商店街に日本人が仮託してきた理念の所在と変遷にある。正確にいえば、商店街という形態をとつて私たちはそこにいかなる価値を具現化してきたのか、そのことをもう一度考えてみませんかといふ

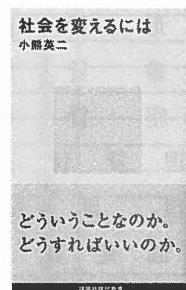
社会生態学研究者 森里陽一

『社会を変えるには』



小熊英二著

講談社新書 1365円



大きなタイトルの本だ。しかも新書である。500ページ以上ある。特徴ははつきりしている。その圧倒的なまでの存在感である。質も量とともにである。

小熊英二氏はかねてより存在感のある書物の書き手として著名な存在だった。『民主と愛国』などは詳細かつ膨大な資料の読み込みから構成された本で、専門書としては異例なほどの賞賛を得た（評者最後まで読んでいないが）。

この本はかなり緻密な構成をとっている。3分の1が問題把握、3分の1が理論的背景、3分の1が現実認識で成り立つており、それぞれががつちりと組み合っている。社会を変える？ そんなくちばしの黄色い問いを発するのには、まだ社会にいる前の学生とか、無風が当然の特殊な世界の特権と考えがちである。とくに

酸いも甘いもかみわけた中年以降になると、かえってそんな大仰な問い合わせでもまかりまちがつて耳にしようものなら、あえて沈黙して唇のはしに皮肉な笑みを浮かべられるのが常だ。

だが、それは決して非現実的な想定ではなくなった。日本はそれなりに盤石なシステムのもとに成長してきた。もちろんす

ここの本は社会を変えるための方法をお盆に乗せて示してくれるのでない。その意味では決して親切な本ではない。むしろ意識的に「不親切」を地でいく本である。読者に考えよと迫

願っている。

この種の本はビジネスに関係ないというのは間違いである。

現代について社会の構造がビジネスの下部構造である。その意思では、ビジネスは社会の波風現実であるのならしかたがない。

大デモの時代に立ち会おうとは思わなかつた。とはいえそれが現実であるのならしかたがない。

「存在感」を持つ書物

べてが順調ではなかつたにしても、システム全体としては一定の経路をたどつて伸びてきた。

今は少なくとも違う。世の成る。そのためには、今ある大切な情報を見つめ、それをも、シス

テム全体としては一定の経路をたどつて伸びてきた。著者はあとがきでいみじくも

り立ちが変わつてしまつた。現在の付加価値の大半は情報によつて成り立つようになつた。今は少くとも違う。世の成る。そのためには、今ある大切な情報を細大漏らさず書き入れた

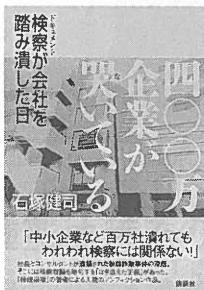
という種類の本である。著者はあとがきでいみじくも書いている。「この本を教科書にしてほしくない」となるほど、自分の発言の影響力をきちんと知つているのだ。同時に、

読む人に自分で考えてほしいと

『四〇〇万企業が哭いている
ドキュメント 檢察が会社を踏み潰した日』

石塚健司著
講談社

1575



久しぶりに読みごたえのある作品だ。いくつもの問題提起をはらむノンフィクションである。ルポの形式をとっているものの、本質はルポを超えたところにある。あまりにリアルすぎて、かえってリアリティを喪失している。

いうか、感じ方が違つてきた。登場人物の心理的機微があまりに鮮やかに描かれすぎていてるくらいがないではないものの、ここにあることはおおむね真実と見てよいだろう。そこがきちんとしていなければ、ここまで圧倒的な説得力は出てこないからだ。

現代の断面図

テーマの一つが、粉飾決算の是非である。一般的の頭の中では粉飾決算は語感からしてもよろしくないに決まっている。誰もがそんなことに好き好んで手を染めはしない。だが、方便としての粉飾決算というものが、うることに、恥ずかしながら評者は本書を手にするまで知らなかつた。

著者は粉飾を弁護もしないな。検察を断罪してもいいな。強いて言えば、この社会の持つ無意識のゆがみの影のようなものを薄い絵筆で繊細になぞつている。実は私たちの社会には自分たちが気づいていない、巨大な死角があるのではないかと言つてはいるように聞こえる。

この作品がジャーナリスティックなスタンスをとりながらも、どこかシユールリアリスティックな印象が消えないのは、そこにあると思う。登場する実在の人物たちは、決して個性的な人々ではない。少なくとも、推理小説に登場するようなあくが強く、時に破天荒な人たちではない。彼らはこの社会に当たり前に生きて呼吸する、ふつうの人々である。あえて言えば私やあなたのような人々である。そこにはとりたてて描くべき個

性や特質のようなものは見当たらない。
そして、重要な対立軸として
登場する検察の人々も、決して
個性的な人々ではない。舞台装
置を180度変えて成立する
くらいふつうの人々である。
終始人に焦点を当てながら、
描いていっているのは人そのものでは

めといふか 無力感とえ漂つて
時代の偏狭化は、法律が機能
しなくなるところに現れるので
はない。逆に、法律が過剰に機
能するところに現れる。多くは
そのなかで何らの叫びも発する
ことなく、すりつぶされていく
のだ。
声なき声をきちんとすくい上
げた勇気に拍手を送りたい。

筆致そのものは恬淡としているのがその表れである。問題は個々の誠実さとか善悪ではない。この社会が本質的にはらむ空白である。誰もがその空白に気づいている。しかもその空白は日々広がっている。今まで本当に機能していたものの、気づけば空白に呑み込まれている。そんな恐怖を感じながら、読了した。タイトルにあるような、センセーショナルなものはない。むしろある種のあきらめない。人と人の間に見る見えざるシステムの陰翳に着目されている。

社会生態学研究者 森里陽一